

身の医療研究会

2016年6月26日

シンポジウム② テーマ『身体症状』を如何にとらえるか

アントロポゾフィー医学の立場から

ほっとメンタルクリニック

八尋美千代

アントロポゾフィー医学では、人間を、物質である肉体、生命を担う生命体、知覚・感情を担う感情体、これら3つの体を統合する自我という4つの体から構成された存在だと捉えています。自然界に目を向けると、この世界には鉱物、植物、動物、人間が存在しています。物質のみからなる存在は鉱物、物質に生命体が浸透したものが植物、更に知覚・感情を持つものは動物、そして「私」という固有の意識を持ち内面から自発的な精神活動が可能な人間が存在しています。この人間だけが持つ体は自我と呼ばれ他の3つの体を統合しています。

これら4つの構成要素からなる人の体には2つの対極の作用が働いています。1つは生命活動を支え、生成、成長作用を促すもので、これを血液プロセスと呼んでいます。もう1つは、神経活動内に典型的に見られる分解、解体作用を持つ神経プロセスと呼ばれる働きです。神経プロセスが最も活発にみられるのは脳など頭部の神経感覚系で、血液プロセスは代謝系臓器や四肢で活発にみられます。アントロポゾフィー医学では、この2つの力の均衡が健康を維持していると考えています。また、全体を統合する自我の力は、私を私たらしめている力ととらえ、肉体においては独自の形姿を保つこと、体内においては免疫系として、魂の領域においては「私」という自己同一性として現れ、この自我の力が常に拮抗する2つの力のバランスを取りながら3つの体に働きかけていると考えています。

覚醒している間、絶えず行われる神経活動や運動などで多くの分解、解体作用がすすみ、人は生命的なものを損なわれ疲労を感じます。眠りに入ると神経活動による知覚・感情体は活動を休止し、生命体の働きが活発になります。生成、再生作用が促進され疲労が回復します。

これらの見方を踏まえ、頭痛やめまい、動悸などの身体症状をどう考えるか、治療では何ができるのか、アントロポゾフィーの観点をご紹介します。